

氏名（本籍）	奥村 恵美佳		
学位の種類	博士（感性科学）		
学位記番号	博甲第	9896	号
学位授与年月	令和 3 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	The effects of educational backgrounds on the relationship between perceived object stability and aesthetic judgments (知覚される物体安定性と美的判断の関係に与える教育背景の影響)		
主査	筑波大学教授	博士（工学）	花里 俊廣
副査	筑波大学准教授	博士（感性科学）	山田 博之
副査	筑波大学准教授	博士（医学）	増田 知之
副査	筑波大学教授	Ph.D. (Psychology)	小山 慎一

論文の内容の要旨

奥村 恵美佳氏の博士学位論文は、教育背景または専門性の違いによる知覚される物体安定性の捉え方の違いと、その違いがもたらす美的判断の違いを明らかにしようとしたものである。その要旨は以下のとおりである。

（目的）

研究の目的を達成するために、著者は、物体安定性の知覚を視覚によるものとして、自立三角図形を刺激として用いた。そして知覚される物体安定性の要因を構造力学要因と視覚的力学要因に分け、(1) それぞれの美的判断との関連性、(2) 関連性の違いと教育背景の関係、を検討する心理実験を計画した。構造力学要因による物体安定性は、重心位置の違いによる転倒可能性の判断を指標とした。視覚的力学要因は、高さ/底辺比の違いによる安定性の感覚的評価によることとし、図形の美的判断における教育背景の違いを検討した。

（実験）

実験に先立って著者は、物体安定性の評価と美的判断の関連が重要である建築をターゲットとし、建築紹介・評論として評価されている雑誌の記事をテキストマイニングで分析した結果、力学的記述と美学的記述の関連が高く、設計的な記述はむしろ関連が低いことがわかったとしている。このことから著者は、力学が重視される分野と設計分野では美学的評価の位置づけが異なると推定し、前者を包括する「工学」、後者に関連する「デザイン」を対照的な教育背景として選択した。

研究 1 で著者は、工学またはデザインを学んでいる大学生/大学院生、対照群として両者のいずれでもない学生の 3 群の被験者に対しリッカート尺度による評価実験を行い、85 名を分析対象とした。結果は、構造力学要因と視覚的力学要因は、どちらも知覚される物体安定性と美的判断に影響しており、安定と感じる形を美しい形であると感じているという、既往研究でも示されている基本的な傾向は類似していたことを確認している。しかしながら、工学学生は、他の 2 群に比べ、不安定さを多少でも感じる場合には不安定であると判断する傾向があり、安定していると感じる形ほど美しいと評価する傾向があることを見出している。この傾向について著者は、工学的発想が安全性をより重視する傾向があることから、安定性が美しさと連合しやすいのではないかと推察してい

る。一方で、デザイン学生は安定さを感じる形を美しいとしながらも、不安定さを感じる形の美しさを重視する傾向があったとしている。この結果に対して、デザインの発想における見かけ上の安定性に対する敏感さは、バランスを崩すことまでを想定して新しい視覚表現の探究が行われていることを理由として考察している。研究1において教育背景の違いは僅かであったことについて著者は、教育背景は個人の獲得した能力とは必ずしも一致しないことが影響しているのではないかと考え、獲得した能力による違いを研究2で確認することとした。

研究2で著者は、工学とデザインという教育背景に対応する獲得した能力として、力学の概念的理解度と美術専門性を測る能力検査の指標によってその程度を評価し、被験者要因とした。知覚される物体安定性と美しさの評価は研究1と同様としたが、転倒推定判断を被験者に求めた。大学生76名の分析対象に研究1と同一の視覚刺激を用いた。結果として、第一に、被験者を通じて知覚される物体安定性、美的判断の関係として、安定と感じる形を美しいと感じるという研究1と同じ結果を確認している。さらに被験者要因である力学の概念的理解度・美術専門性の違いが、転倒推定には影響を与えないことを明らかにした上で、力学の概念的理解度の高い被験者は、力学的に不安定な形の安定性を厳しく評価し、見かけ上の安定性の影響を受けにくいという結果が得られたとしている。また、美術専門性において、専門性の高い被験者は安定なものを美しいとしながらも、より安定性が低い形の美しさを重視するという傾向を明らかにしており、この違いは大学における教育の分野よりも明確な違いであったとしている。

(考察)

研究1と研究2から著者は、知覚される物体安定性と美しさの判断の大まかな傾向は似ているものの、デザインを学んでいる学生は不安定に見えるものまで美しいと評価する点で工学学生との違いがあり、獲得した能力においては、力学の理解の程度はより厳密な安定性の判断を生み出す一方で、美術専門性は美しいと評価する形の安定性の幅が広い傾向を有することを明らかにした。

審査の結果の要旨

(批評)

本論文の結論として著者は、教育背景あるいは獲得した専門性が安定性と美しさの感覚的評価の違いを生み出す可能性を示している。教育背景や獲得した専門性によってもたらされる感覚的評価の個人差を独自の方法で定量的に示そうと試みた点は、今後の感性評価のメカニズムを研究する上で価値ある結果を導いていると考えられる。

令和3年1月28日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士(感性科学)の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。